

「祈りのカタチ」

被造物である森羅万象と人為の狭間で

浜谷 信彦

“Form through Prayer”

A Study on Arts

Seeking the Balance between God’s Creation in Nature and Human Artifice

Nobuhiko HAMAYA

Abstract

In the beginning the Word already existed; the Word was with God, and the Word was God. From the very beginning the Word was with God. Through him God made all things; not one thing in all creation was made without him.

[The Bible New Testament The Gospel according to John 1 : 1-3] ⁽¹⁾

God put His grace and intention in all His Creation, such as the earth, the universe, the nature and Laws of nature.

In advance, God has prepared them well for us. However, We have not been able to find enough The grace and intent of God in His Creation. To express invisible things is art. Through arts, we can rediscover everyday things from another perspective. Behind artworks, there are philosophy, theory and thoughts. Also, theory is found in the process of creating work.

The purpose of these artworks is never intended to express or embody the Bible directly. These artworks, “Form through Prayer”, and the process of creating works are response to God, questions, praises, prayers to God and conversations with God. It is also a record of my journey to faith that has been led by the Lord.

In other words, this study on Arts is to seek the balance between God’s Creation in Nature and Human Artifice. It is also a confession of faith made visible by the language of arts.

はじめに

目に見えない物事や、見ているが観えていないものを表現し再認識するのが芸術の働きである。作品と論文は異なる表現方法で描かれてはいるが、造形芸術における作品と論文は表裏一体であり相互に補完し合いリンクする等価なものである。芸術やデザインの作品の背後には哲学や思想や理論があり、理論は作品や創作活動の中から発見されるのである。

この研究は帰納的な方法により、被造物すべての造り主である神の恵や意志を探求し、再度認識しようとするものである。筆者がこれまで企画展や展覧会等で個々に発表してきた造形表現作品の中で、特にキリスト教信仰における神への「祈り」を通して生まれてきた造形作品と、その制作の過程で生まれてきた言葉について考察し述べていく。「カタチ」は物体の形であり、同時に形而上の形でもある。これらの造形作品とそのプロセスすべては、目に見えない神との対話であり、応答であり、問いかけであり、賛美であり、それらは祈りである。祈りや自我との葛藤の痕跡は作品という「カタチ」となり表出されている。つまり、それらは信仰への道程の記録といえる。また「祈りのカタチ」は造形という言葉により可視化された信仰の告白でもある。

「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によってなった。成ったもので、言によらず成ったものは何一つなかった。」(新約聖書ヨハネによる福音書1章1節～3節)⁽²⁾

研究の構造

新約聖書には、共観福音書とも呼ばれる3つの福音書があり、同様の題材について異なる著者が取上げて書いている。本稿の構造も、この共観福音書の構造を参考にしている。従って、大系を持って序論から結論へ向かい直列に配置されたものではない。喩えるならば、GPS(全地球測位システム)が複数の人工衛星から発する電波によって、より正確な座標を導くシステムと同様なイメージである。

このように、神への祈りや賛美という一定のベクトルを持つそれぞれの作品と言葉を、図1のようにテーマである中心軸に沿ってスパイラルしながら散文的に配置し研究を進めていく手法である。複数の作品と言葉を通して多くの視点からアプローチすることにより、テーマの輪郭が徐々に明確化され、核心に迫っていくような構造を試みている。

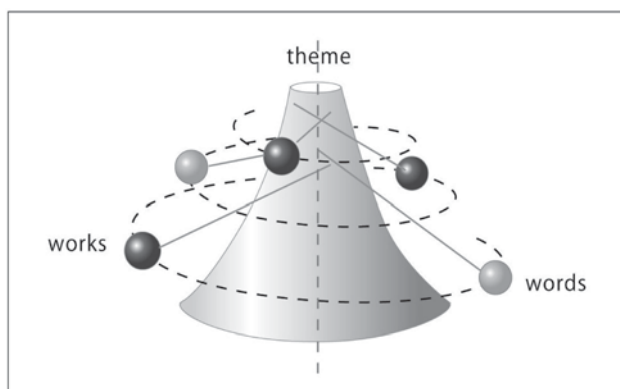


図1

森羅万象に内在する神の意志

神によって創られた被造物である森羅万象には、予め神の大いなる恵と意図が存在する。風は目に見えないが木々を揺らし、水面に波を与え、そこに光が乱反射する。刻々と形を変えて流れる空の雲など、美しい大自然の造形に満ちている。それらの目に見える造形現象と、それらを生み出す自然界の法則のすべてにも、造り主である神のメッセージを読み解く手掛かりがある。自然は創造

主からの恵みである。また、美しく時に厳しく我々人間は畏敬の念を抱く。一時も同じ姿にとどまる事のない美しい自然。その自然の感動を写しとり定着する事は困難である。しかし、それでも人間は自然に感動し、自然を模倣して造形表現をしてきたのである。人間には自然を表現せざるをえない何らかの動機が在るのではないだろうか。⁽²⁾

有限の世界 無限の世界

有限である人間が無限である神を真に理解することは不可能である。善悪の果実を食べてしまった我々人類は、地球を何度も破壊するほどの科学技術を持ってしまった。しかし、どれだけ科学技術が発達しようとも、時間の始まりと終わり、有限である空間の広がりを超えた無限を理解することは出来ない。人間にとってこの世界は、時間的にも空間的にも、今そして此处というように部分的に表れてくる。神の被造物であるこの世界の全体を、俯瞰的視点に立ち完全に理解することは出来ないのである。我々は有限の内側にいる。しかし、無限の神により創られている。

この世界は初めから極めて良いものに創られており、我々人間に必要なものはすでに用意されていると考える。「初めに、神は天地を創造された。」創世記1章1節⁽³⁾ 「神は御自分にかたどって人を創造された。～」創世記1章27節⁽³⁾ 「神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった。～」創世記1章31節⁽³⁾

有限な我々人間に既に与えられているこの世界に、何気ない日常の微細で部分的な時間と空間の事象の内にさえも、神の意志やメッセージを感じ取る事が出来るのではないだろうか。我々の関心は、それらの断片を紡いで、最大の無限へ最小の無限へと少しでも向かおうとするのである。

15世紀に哲学者で数学者であるブレイズ・パスカル (Blaise Pascal 1623-1662) の「パンセ」(1670 発刊) おいて、有限の人間が無限の神へ迫る方法として入れ子の構造的を考えている。これは20世紀にフランスの数学者ブノワ・マンデルブロ (Benoît Mandelbrot) が提唱したフラクタル理論、シダの葉や血管の分岐などの自己相似構造の概念にも共感するものがある。⁽⁴⁾

時間的・空間的にこの世界をパスカルの入れ子やフラクタル理論を借りて解釈するならば、無限から有限そして無までをつらぬく自己相似構造として捉えることが出来る。無限の神の被造物であり、良いものとされた森羅万象と、神をかたどって創造された人の中に、すでに内在されている神の意志や性質を類推できる手掛かりを見出すことができるのではないだろうか。

そして、キリストは有限から無限への扉なのである。「神は言われた。「わたしは必ずあなたと共にいる。このことこそ、わたしがあなたを遣わすしるしである。～略」出エジプト記3章12節⁽⁵⁾

「神はモーセに、「わたしはある。わたしはあるという者だ」と言われ、また、「イスラエルの人々にこう言うがよい。『わたしはある』という方がわたしをあなたたちに遣わされたのだと。」出エジプト記3章14節⁽⁵⁾ 「私はアルファであり、オメガである。最初の者にして、最後の者。初めであり、終わりである。」ヨハネの黙示録22章13節⁽⁶⁾

シンボルの表現について

美術における一般的なシンボルの表現の例として、15世紀イタリアのボッティチェリ『春 (プリマベラ)』で「春」や「西風」などが擬人化されている。⁽⁷⁾ シンボルは一見単純そうではあるが、それらの意味を教えられない限り理解は難しい。シンボルはもともとギリシアで契約を結ぶ際、照

合に使用されていた陶片や板切れを2つに割り作られた割符を意味するsymbolaに由来する。特定の人のみに判るものであった。シンボルに近い言葉に、形のない抽象観念を表すアレゴリー(allegorein)があり「寓意」と邦訳されている。(小学館『国語大辞典』)形のない抽象観念、鳩が平和を、ライオンが勇気を示す。その結びつきはいったん認められると永く広く伝えられる。⁽⁷⁾また、象徴的な持ち物でも、時代や場所により連想する内容が異なる。シンボルは歴史的・社会的・心理的な産物であり、時代の経過にともない最初の意味が変更されてしまっている可能性もある。

十字架は、現在では神・キリストを連想するシンボルである。しかし以前は、十字架は磔刑つまり処刑のシンボルであったのである。⁽⁸⁾やはり、鑑賞者はその時代と場所の文化について理解が必要であり、作家はその点について十分に留意して用いる必要がある。

キリスト教における信仰の表現

旧約聖書においてモーゼ五書にはじまり、偶像崇拜の禁止について記されている。「あなたはいかなる像も造ってはならない。上は天にあり、下は地にあり、また地の下の水の中にある、いかなるものの形も造ってはならない。あなたはそれらに向かってひれ伏したり、それらに仕えたりしてはならない。わたしは主、あなたの神。わたしは熱情の神である。わたしを否む者には、父祖の罪を子孫に三代、四代までも問うが、わたしを愛し、わたしの戒めを守る者には、幾千代にも及ぶ慈しみを与える。」また、「あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない。みだりにその名を唱える者を主は罰せずにはおかれぬ。」旧約聖書 出エジプト記 20章3-7節⁽⁵⁾「あなたたちは偶像を造ってはならない。彫像、石柱、あるいは石像を国内に建てて、それを拜んではならない。わたしはあなたたちの神、主だからである。」旧約聖書 レビ記 26章1節⁽⁹⁾ほか、出エジプト20:23、申命記4:16、4:23、5:8、27:15など、偶像崇拜は禁じられている。単に中身の無いはりぼてのような彫像や図像のみならず、人間や動物、その他の物品を神とし信仰の対象として拜んではならない。本当の神以外はすべて物事に偶像と成りうる可能性があるのである。確かに、神を目に見える図像として表現することは、絶対者であり無限である神を限られたイメージに閉じ込めてしまう危険性がある。しかし、人は目にみえないものをイメージするために、見ることのできる何らかの拠所となるものを求めてしまう。神が人間に与えられたタラントである音楽や美術を、何処へ向かいどの様に用いていくのか、それが重要である。

中世の神学思想に大きな影響を与えた哲学者プロティノス(205-269)は、著『エンネアス』で「芸術はたんに目に見えるものを再現するのではなく、自然がその源としている最高原理へも立ち戻るということをしなくてはならない」「美術家の存在理由は最高知を反映することである」と記している。⁽⁷⁾

初期キリスト教には、ノアの箱舟、怪魚の口から吐き出されるヨナ、など旧約に取材したものや、磔刑、受難、降誕図、羊飼いの礼拝など、中世には最後の審判や聖母の図像、ルネサンス以降は人間味が豊かな聖母子や聖人図像、宗教改革以降の16世紀頃からはマグダラのマリアも加わり、プロテスタント系美術家のレンブラントなどはイエスとその弟子の間柄を描いている。また、フラ・アンジェリコは受胎告知の図に聖句を書き込んでいる。⁽⁷⁾

大聖堂に描かれてきた聖書を主題にした壁画や彫刻、ステンドグラスなどの美術工芸は、聖書も持てず、今日に比べて識字率の低い時代にあって、より多くの人々に信仰を伝えるために大きな役

割を果たしてきたと考えられる。音楽芸術の在り方においても同様な論議がある。造形芸術にしても音楽芸術にしても、神以外の対象を神聖化しない限り具体的な表現を否定するものではないと考える。芸術は、神への祈りと賛美のひとつの在り方として伝道に貢献してきたのではないだろうか。

芸術と宗教の関係性について『芸術と宗教－キリスト教的視点より－』石浜弘道編著では次の様に記している。「芸術は私たちの魂を救うことはできないが、魂の姿勢をもっとも高いものである神との交わりに向けて調えることができます。芸術は信仰を製造したり、創造したりすることはできないが、信仰を創造する福音の言葉に仕える事ができます。」そのことから、芸術は宗教に代わることは出来ないが、芸術は魂を神との交わりに向け調えて、福音の言葉に仕えることができるのである。⁽¹⁰⁾

筆者の作品制作は、神や聖書を直接表現するものではなく、祈りの表現を探究するものである。絶対者であり無限であり主である神そのものを限定してしまうような表現はできない。芸術における信仰の表現は、その事を自覚し畏敬を覚えて望むならば、芸術家にとって描いても尽きることのない永遠のテーマと成りうるのである。

記号を超えて

ゲシュタルト心理学のプレグナンツの法則で、人は簡素で秩序あるまとまりで知覚しようとするというのがある。人は複雑で理解が困難な物事に対して不安を取り除いて安心するために、言葉や記号に置き換えグループ化したりするのである。また、音楽では小節などのまとまり毎に構成音に付けるコードネームがあり全体像を把握しやすくする利点があるが、コードから元の音楽へは還元できない。映画や小説においてもストーリーや粗筋などの骨格は重要であるが、真の感動はそれだけでは伝わらない。芸術の本質は言葉や記号を超えたところにある。

言葉に変換しやすい記号 (cord) 的なモチーフやシンボルを使用することで、鑑賞者がそれらを言葉に置き換えて安心してしまい表面的な理解に留まり、それ以上のことが届かなくなってしまう危険がある。その点において十分留意して用いなければならない。はじめから変換できる記号がなければ五感を駆使し、モチーフの本質に迫り抽象化された作品と対峙せざるを得ないのである。

構成や計画と部分

デザインや造形芸術における構成や計画と部分という関係において、常に構成や計画が優位で、部分はその下位であるという漠然とした認識があるのではないだろうか。確かに構成や計画は重要である。しかし、構成や計画それだけではモノは成立しない。全体そのものではないのである。プロダクトデザインでは、デザイナーが図面で表現しきれないところにもモノとしての魅力が多くある。図面と共に質感や光沢など素材の見本を検討するが、それを支えている現場の職人技術や素材が持つ性質そのものが魅力の重要な要素であったりするのである。アップル社のプロダクトにあるモノとしての魅力は、洗練されたミニマルなフォルムのデザインを支える素材自体の魅力とそれを引き出す技術を捉えていることにある。これは日本の伝統的工芸における素材の質感を大切にするという姿勢とも通ずる。また、キリストにあっては体の足も頭もそれぞれの部分が互いに尊重される。

常に全体的な事が優位であるという固定観念を改めて、全体的な構成や計画から部分、部分から構成や計画へと、双方向でイメージを発想することに新たな可能性がある。

素材から物質へ

筆者はプロダクトデザイナーとして様々な素材と関わってきたが、中でも多く関わってきたものに樹脂（プラスチック）がある。それらは可塑性や加工性がよく、とても便利で表面処理でメッキを施せば金属風になり、プリントを施せば木材の様に、また融点の異なる樹脂を混入し石材の様に見せることも可能である。しかし、樹脂には樹脂固有のすばらしい表情があるのだが、その変幻自在な性質の所以か、樹脂は天然素材の代用として用いられることが少なくなかった。20世紀のプロダクトにおいて大量生産のための合理化などにより、デザイナーと天然素材や伝統的な技術は疎遠になってしまった。20世紀後半からエコデザイン、サステイナブル・デザインなどのデザインの世界観や思想や理念が表れて、従来の天然素材についても再検討され用いられるようになってきた。現在、デザイナーが天然素材や伝統的技術を用いて仕事をしていくためには、その特性を十分に理解しておく必要がある。もしくは、その素材や技法に精通した職人との共同作業が必要である。

筆者は土・陶磁という古くからの素材に出会い、コントロールしにくい素材の性質と格闘する中で、全てを人の計画であるデザインどおりにしようとする姿勢に疑問を持つようになった。あらかじめ備わっている素材の物性に逆らわずに、それを活かして造形する研究をおこなってきた。

デザインや造形のアプローチとして素材を強引に従わせるのではなく、天地創造よりあらかじめ物質に備えられ用意された性質や現象を活かして、その目的やメッセージや豊かな表情へと変換することが大切であると考えている。

神のことばによる造形プログラム

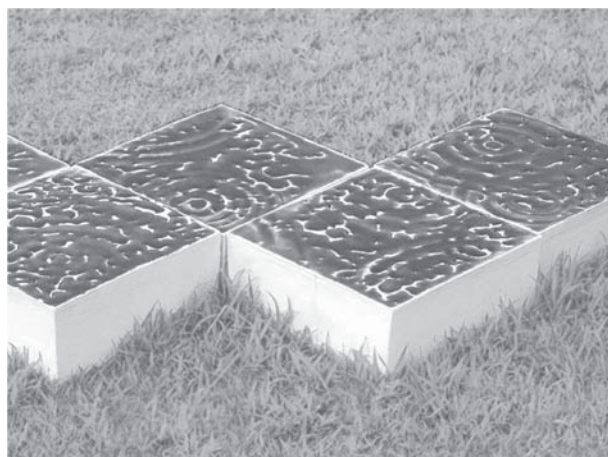
神が創った美しいこの地球には、大地と海の豊かな造形がある。自然の造形には重力など目には見えない自然の法則が造り出す現象の痕跡としての形態がある。氷河のフィヨルド、砂漠の砂紋、海の波、数え上げれば限りがない。水の波紋は見ることのできない風という自然現象が造り出した造形である。天地創造の痕跡である地球の造形から、背後にある目には見えない神が創られた法則や秩序を推測することが出来る。また、エネルギーや素粒子がある一定の秩序に従い運動するとき物質が現れる。「ことば」は神の意志であり、それにより秩序と調和の世界を形成し存在させている。

「目に見えているものは、目に見えるものからできたのではない〜」新約聖書：ヘブライ人への手紙11章3節⁽¹¹⁾

高温焼成の過程で釉薬の表面張力や重力、摩擦など様々な自然の力が造形に作用する。収縮し、歪み、流れる、抵抗せずに積極的に受容してみる。

目には見えない自然の法則や秩序を意識し、再認識するための装置でもある。

① 「ripples- II」 2002



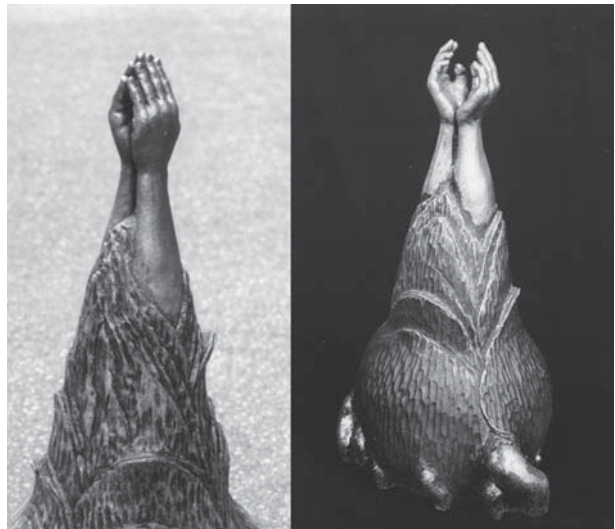
求道

祈りは、神への問いであり、告白である。

手をのばしたとき…
すでに、誰かに手を掴まれていた。
救いは自己によるものではなく、
神による一方的な恵である。

② 「祈りⅠ」 prayer I (部分) 1991

③ 「祈りⅡ」 prayer II 1991

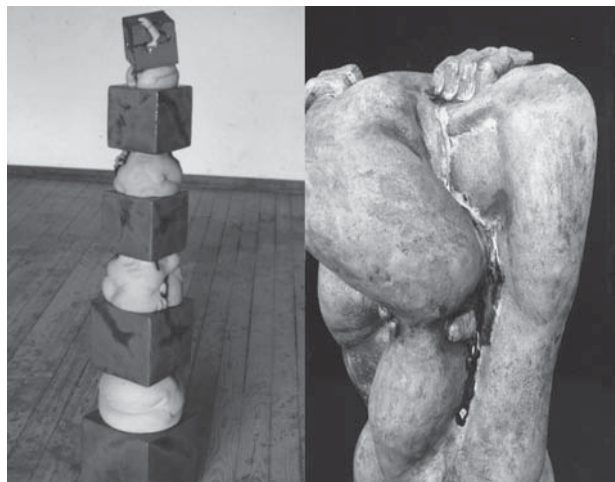


葛藤

神から離れて、人は闇に彷徨う。

④ 「イケルモノたちⅢ」 fragile III 1992

⑤ 「イケルモノたちⅠ」 fragile (部分) 1991



シンボルを用いた表現

垂直に天から地上に降るキリストの慈愛
波紋の様に広がる福音
降臨を待ち望むAdvent
「さかな」はキリストを意味するシンボル。
イクトゥス (IXΘYΣ ギリシア語)⁽⁷⁾

⑥ 「Advent」 2009



人は何処へ向かうのか
過去・現在・未来
最小の無限、最大の無限へ

⑦ 「環2006～神が創りし世界・人が造りし世界～」 2006

ゆだねるカタチ

型と素材のせめぎあいの痕跡として、あふれた部分であるバリは、通常は取り除かれてしまう。

目指す計画・デザイン・型があり、
あふれる個性が生きる。

計画と実践

教育と個性

律法と自由

⑧ 「ゆだねるカタチCross」 Cross 1999-2001



あふれるカタチ たりないカタチ

「というのは、神がお造りになったものはすべて良いものであり、感謝して受けるならば、何一つ捨てるものはないからです。神の言葉と祈りによって聖なるものとされるのです。」

新約聖書 テモテへの手紙一 4章4～5節⁽¹²⁾

私たち人間、一人ひとり是不完全である。
しかし、神は、何一つ捨てるものはないと云われる。

すぎたるモノ（者）も

およばざるモノ（者）も

…それぞれの賜物を持つ。

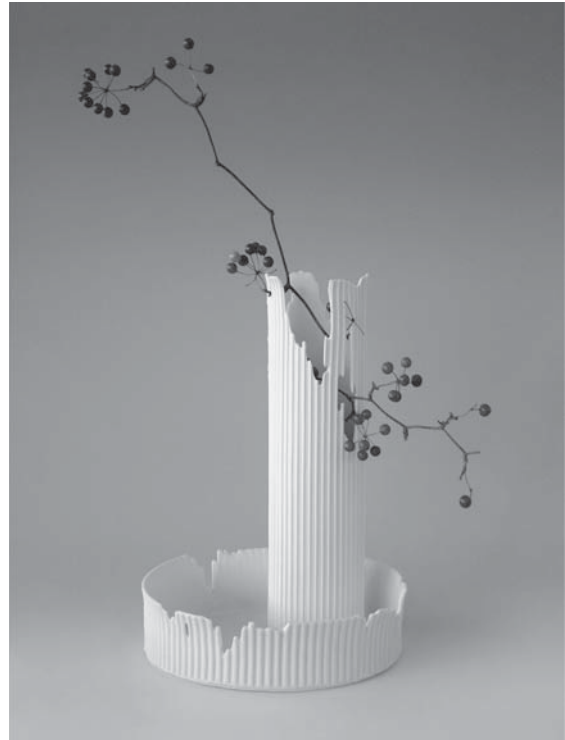
⑨ 「たりないカタチ」 under the brim 2003

⑩ 「あふれるカタチ」 overflow 2003

神のことばによりできた世界

人智を超える秩序と調和の世界、一見

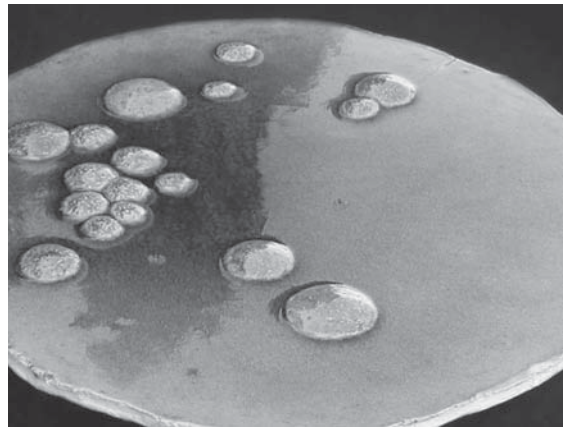
カオス的な事象さえも内包するコスモス



受容するカタチ

固定された美と強い自我からの開放。周囲の映り込みを積極的に受容することで、時間と空間により表情を変化させる。

作品に映った空の雲が、静かに流れていく。短編映画の1シーンのように、一瞬の情景に言葉を超えるメッセージがある。



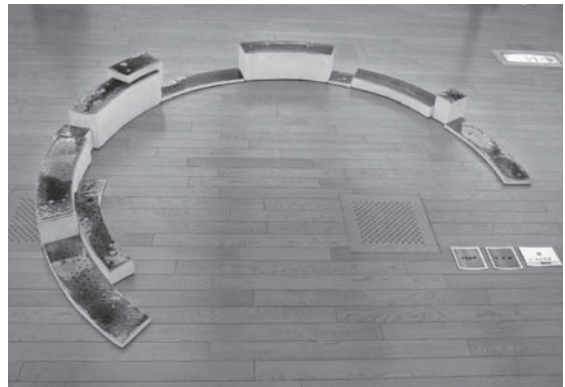
⑪ 「活ける水」 breath (部分) 2005 陶磁

水は天を仰ぐ

凧いだ湖は、その湖面を水鏡にして青い空を映し夜空の月を映す。当然の事ではあるが地上には重力が存在しすべての物がその影響を受けている。日常生活に一喜一憂し疲れを覚え、覗き込んだ水たまり、その水鏡の向こうに青い空がある。目には見えない力により、水面はいつも天を仰ぐ。

寛容な色彩

幾つもの生命の中を流れ、時代を映し巡るアオ。



⑫ 「環2007」 ring 2007

インスタレーション 環境との関係性

作品が空間との関係性の中で成立し、周囲のモノと積極的に共存する。しなやかで受容的な造形の在り方である。従来の彫刻的で自我の強い自立的なフォルムとは目指すところが異なる。

おわりに

これまで「祈りのカタチ」の作品とその理論について考察してきた。ゆだねるカタチ、あふれるカタチ、たりないカタチ、受容するカタチと、より抽象的な志向になり、目には見えにくいモノやコトの表現へと変化している。また、自己の信仰表現から、神の恵とその意図そのものへと関心が移行してきた。今後、これらの作品や理論の指し示すベクトルをたよりに研究を深め、応答としての祈りや賛美をカタチにしていきたい。また、本稿に関連する内容と思われる筆者の陶磁のルーツでもある古九谷とキリスト教に関しては、別の機会に記すことにしたい。

【謝 辞】

本研究に際し、日々研究と創作を支えて下さっている日本バプテスト連盟理事長 田口昭典牧師、長崎バプテスト教会 友納靖史牧師、ならびに、石川県九谷焼美術館、古九谷修古祭、活水学院の関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

【文 献】

- (1) Today's English Version The Bible New Testament : The Gospel according to John
- (2) 日本聖書協会「聖書（新共同訳）」新約聖書：ヨハネによる福音書
- (3) 日本聖書協会「聖書（新共同訳）」旧約聖書：創世記
- (4) 吉永良正 著訳「『パンセ』数学的思考」みすず書房2005
- (5) 日本聖書協会「聖書（新共同訳）」旧約聖書：出エジプト記
- (6) 日本聖書協会「聖書（新共同訳）」新約聖書：ヨハネの黙示録
- (7) 中森義宗「キリスト教シンボル図典」東信堂 1993
- (8) 柳宗玄・中森義宗 編「キリスト教美術辞典」吉川弘文館 1990
- (9) 日本聖書協会「聖書（新共同訳）」旧約聖書：レビ記
- (10) 石浜弘道 著「芸術と宗教－キリスト教的視点より－」北樹出版2008
- (11) 日本聖書協会「聖書（新共同訳）」新約聖書：ヘブライ人への手紙
- (12) 日本聖書協会「聖書（新共同訳）」新約聖書：テモテへの手紙一

【参 考】

- ・浜谷信彦「自然と人為の間の造形～過剰湯回り（バリ）と湯回り不足の造形」2003

【作品画像】

- ・浜谷信彦「ripples-II」2002
- ・浜谷信彦「祈り I」1991
- ・浜谷信彦「祈り II」1991
- ・浜谷信彦「イケルモノタチ III」1992
- ・浜谷信彦「イケルモノタチ I」（部分）1991
- ・浜谷信彦「Advent」2009
- ・浜谷信彦「環 2006 ～神が創りし世界・人が造りし世界～」2006
- ・浜谷信彦「ゆだねるカタチCROSS」1999-2001
- ・浜谷信彦「たりないカタチ」2003
- ・浜谷信彦「あふれるカタチ」2003
- ・浜谷信彦「活ける水」breath（部分）2005
- ・浜谷信彦「環 2007」2007

(2011年1月31日受理)